

ケースがほしくて、しっこくねだったことがあったっけ。懐かしいなと、ほうほうとうなずきながら風汰が隣を見るのと、しおん君は割り箸を使っていた。

「なんだよ、箸、忘れちゃったのか」

風汰が笑うと、あいりちゃんはぐっと身を乗り出した。

「ちがうよ。しおんくんはいつもわりばしだもん」

えっ？ そう君も「ソーだよ」とうなずく。

しおん君は黙ってうつむいたまま箸を両手でにぎった。

もしかして、隠そうとしている？ でも、長い割り箸は、し

おん君の小さな手から半分以上はみ出している。

風汰は唇を一度噛んで、くんとあごをあげた。

「オレ、割り箸好きだぜ。こーやってさ、ばちって割んの、

かっけーだろ」

口で箸を割ってみせる真似をすると、しおん君は風汰を

見上げた。

「まあ素人がやると、斜めになったりするんだよな。おまえ、

できる？」

ふるふるとしおん君がかぶりを振る。

「だめじゃん、じゃあ、明日オレが見本見せてやる」

箸を握っていた、しおん君の手が開いた。

よし。そんていい。おまえがはずかしがることねーし。

「ぼくもわりばしもってくる」

「あいりも！」

「なら、おまえらにも教えてやるよ」と、風汰は「いただきまーす」弁当を開いた。「どうぞめしあがれ」。三人は声をそろえて言うのと、興味深そうに弁当をのぞき込んだ。

「なんだよ、あんま見んなよ」

風汰が言うのと、あいりちゃんが驚いたように言った。

「フォークでたべるの？」

すると向こうの席でいつき君も「きのーもフォークだっ

た！」と声を張り上げる。

ちっ、面倒くせー。

「いいんだよ。なんで食おうと腹に入れば一緒だし」

えーっ！ と、かほちゃんがアホみたいな声をあげた。

「おおきいこは、はしだよ」

「ふうたくん、あかちゃんみたい」

かほちゃんをつぐみちゃんは「ねー」とうなずきあう。

反論する気も失せて、弁当にフォークを突き立てている

と、しおん君が五人席のほうへ振り返った。

「ふうたくんは、あかちゃんじゃないよ」

小さなささやくような声が、すーっと部屋中に響いた。

「だって！」

かほちゃんが立ち上がった。

「ぼんださんだっておはしだよ。おはしじゃないこは、ひ

つじさんだもん！」

「はい、そこまで」